

第1章

戦場と化した 福島医大

—震災直後の被災者と、避難患者の治療、救援現場の姿を集めた。
国内外からの支援や福島医大震災特設ページで速報された案内、
学内対応の書面など、あの時の思いを共有できる素材も掲載した。

2011年3月11日(金)14:46

地震発生 (福島市・震度6弱)

だれも経験したことのない大地震が発生。福島医大は騒然とした。医師と看護師が協力して患者さんを避難誘導し、処置中の患者さんには医師と看護師がそばに付き添った。テラスの屋根は蛇のようにうねったという。

東日本大震災の発生

2011年3月11日 14時46分

震央:三陸沖、最大震度7

福島県内最大震度 6強

マグニチュード9.0

大津波で東京電力福島第一原発の
全電源喪失



附属病院外来の車寄せに飛び出した人たち

病棟患者「人的被害なし」

外来患者を正面玄関に集約「人的被害なし」

時折日は差すが、寒空の広がる午後だった。患者、職員、学生の安否確認を行い、幸い人的被害はなかった。



15:30 手術中の患者について中断を最終決定。16:42までに全患者退室、ICU移送

15:46 全館放送で被害状況を周知「人的被害なし、建物は軽微な被害」



取るものもとりあえず避難する職員。書類棚の扉が開いて書類ファイルが崩れ落ちている



地震直後の1号館(管理棟)3階の企画財務課フロア

大学本部・学部施設中庭



15:00 病院長室に福島医大災害対策本部設置



福島県災害対策本部に調整医官を派遣

緊迫した中、11日の21:30に招集された第1回の全学全職種ミーティング。第2回を12日0:00に開催した



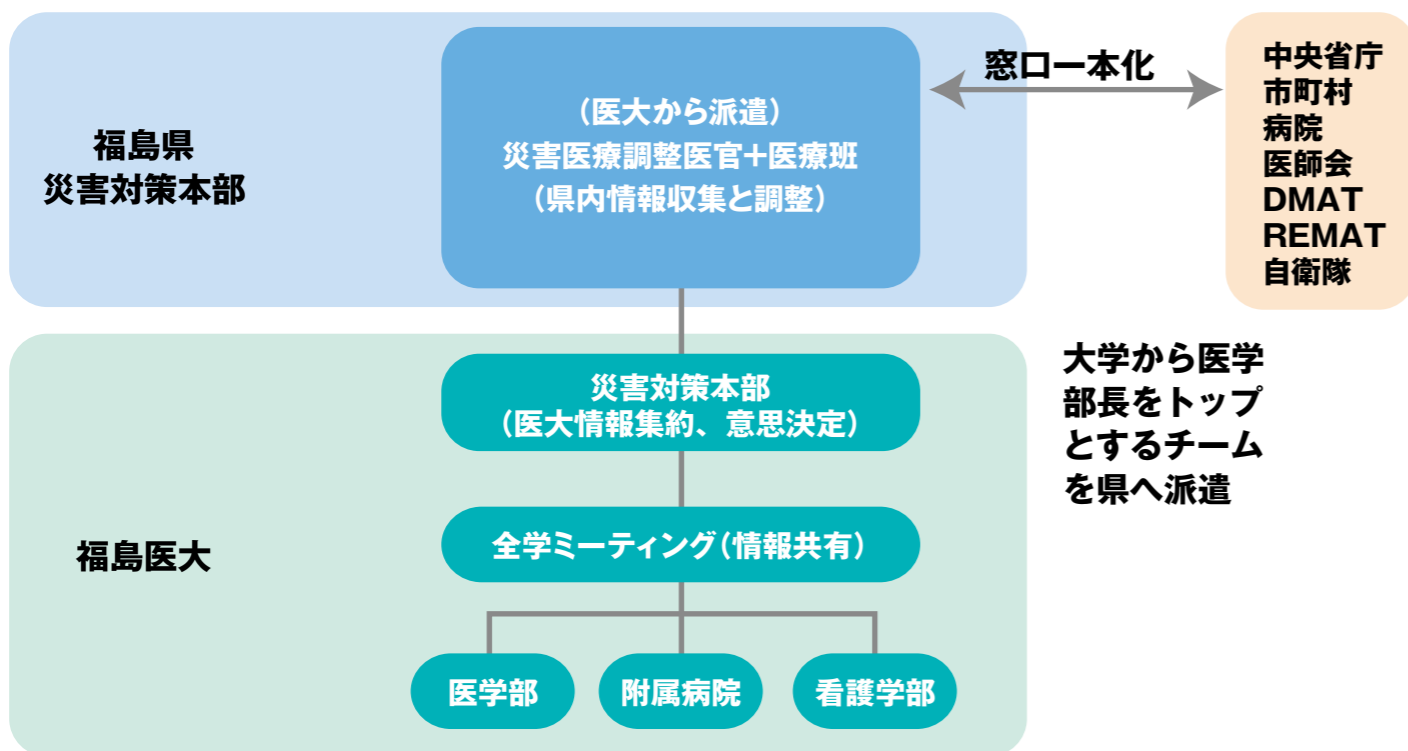
3月15日撮影

全学一丸となって

—情報の共有化・臨機応変に対応—



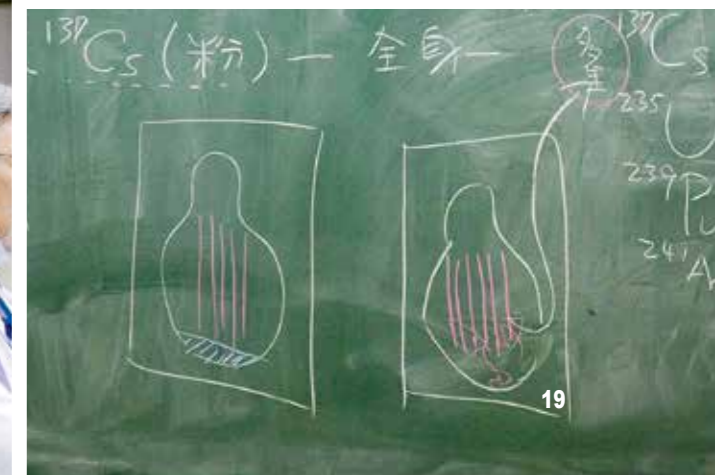
原発事故対応：県と医大の連携



全学ミーティングは12日は9時、15時及び21時にも開催。13日は9時、15時及び21時に開催。その後1日に2回開催、しばらくして1日1回、4月に入ると週1回、6月からは月1回の頻度で継続して開催した



3月15日撮影



19

15:30 医師・看護師の役割分担

トリアージについて確認・場所の設定



1階正面玄関ホールにベッド33台を配置して受け入れ準備

各階の担架、湯たんぽ、救急カートを救急外来に集約



地震後4時間半で断水。

病院機能は既に低下

診療体制の変更
外来診療を重症患者に特化



学生ボランティアが地震直後から入院患者の搬送など、災害直後の人手不足を補う





全国から35のDMAT（災害派遣医療チーム）180名参集

福島県統括DMAT立ち上げ

東日本大震災による原発事故で30km圏内の病院の患者搬送が必要になり、福島医大は患者搬送拠点・中継地点としての役割を担い、DMATと連携して患者搬送などを行った。



3月20日、南相馬市立総合病院の26名を受け入れ、玄関ホールで対応



病院敷地内に設営された緊急消防援助隊の現場指揮本部

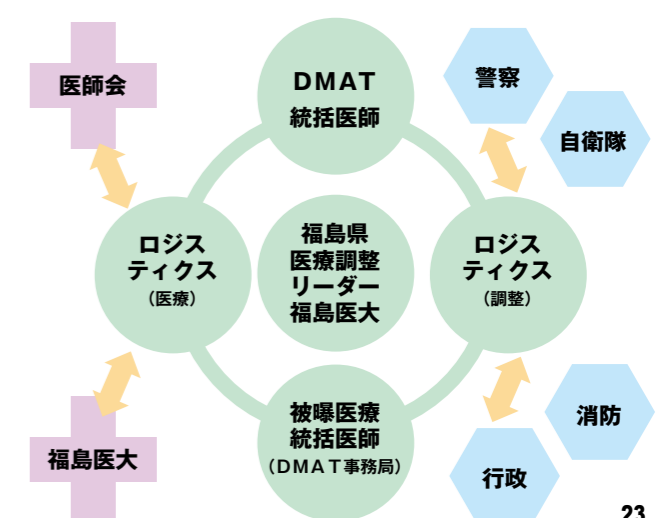


初動3日間で168名の救急患者（トリアージ：緑93,黄44,赤30,黒1）に対応

DMATなどの休憩場所には看護学部の実習室が与えられた



県庁調査本部 統括DMAT 組織図



ドクターヘリ等 参集基地病院として



DMAT本部 12:00

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕

(①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕)

(DMAT本部)

- 12:30 必経区隊 E-7-DMA7 巨大に到着
- 12:37 長野Dr.ヘリ 福島区大へ3分後(約同予定)
- 12:40 必経区隊 マシワ 必経 搬送PCと連絡
- 12:48 山形Dr.ヘリ 福島区大へ向かう着陸
- 13:00 13:05 兵庫Dr.ヘリ 福島区大到着
- 13:10 福島Dr.ヘリ 5分後到着
- 13:11 NIKDr.ヘリ 福島区大到着
- 13:13 NIKDr.ヘリ 到着 (3:14着陸)
- 13:10 北総Dr.ヘリ 福島区大離陸
- 13:25 福島Dr.ヘリ F-6到着
- 13:30 長野Dr.ヘリ 新潟空港 106番位置 (3:40に到着予定)
- 13:34 兵庫Dr.ヘリ 福島区大離陸
- 13:42 福島区大へ PC2名搬送決定 (福島Dr.ヘリ)
- 13:47 静岡Dr.ヘリ 全津若松 (3:42離陸 必経へ)
- 13:56 静岡Dr.ヘリ 10分後 角田到着
- 14:00 必経 必経 必経 必経
- 14:07 静岡Dr.ヘリ 必経へ 角田着陸
- 14:10 福島Dr.ヘリ 15分後 全津中央へ
- 14:19 福島Dr.ヘリ PC1名搬送決定
- 14:02 長野Dr.ヘリ 離陸 角田へ 静岡 福島
- 14:25 15:40 長野Dr.ヘリ 角田到着予定



<http://www.sai-gai-touseki.net>

人工の助けから
受け取る機関

3/12 18:40

ドクターヘリ運航調整本部

11107411153016 US-PAS: 6883

必経空送 (群)

高知 岐阜 浜松

災害対策 1分

福島区大

待出機 必経

北総(JA914)

福島(JA1190)

信州(JA1170)

兵庫(JA1200)

大阪(JA907H)

兵庫(JA8224)

山口(JA6125)

熊本

静岡

190-9025-5022

福島県庁: 090-



3月12日「重症患者に特化し、一般外来は閉鎖」する旨を報道機関へテロップ依頼



3月11日深夜、外傷患者が多数来院することを想定して準備したが、予想に反してほとんど来院せず通常の夜間受診数で静かな夜だった。

男性

- 37才 野田方面
- 27才 川俣方面
- 24才 森谷方面
- 40才 雲山方面
- 40才 松川方面

女性

- 37才 野田方面
- 27才 川俣方面
- 24才 森谷方面
- 40才 雲山方面
- 40才 松川方面

発災直後の3月11日15時46分、全館放送で人的被害がないこと、大きな物的被害はないことに加えてトリアージの場所が伝えられた

次 整形外科外来
 次 内科新設外来
 次 急救外来

救急センター 6683
 高田 6669
 378-1

自治会館 3F 大会室
 7-4883

6号線 X 6412
 6号線 X 6412

自治会館 3F 大会室
 7-4883

救急センター 6683
 高田 6669
 378-1

赤 Dr. 菅野
 黄 Dr. 二階堂
 緑 Dr. 大歳

石井
 山田
 武田

Work in 菅野

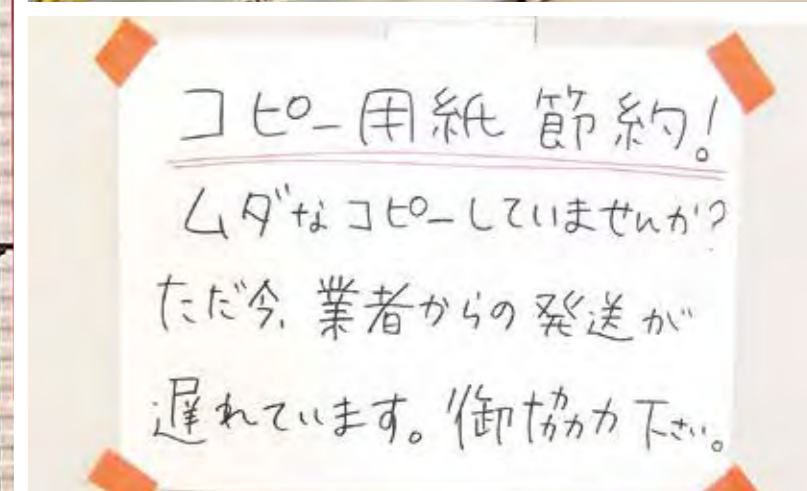
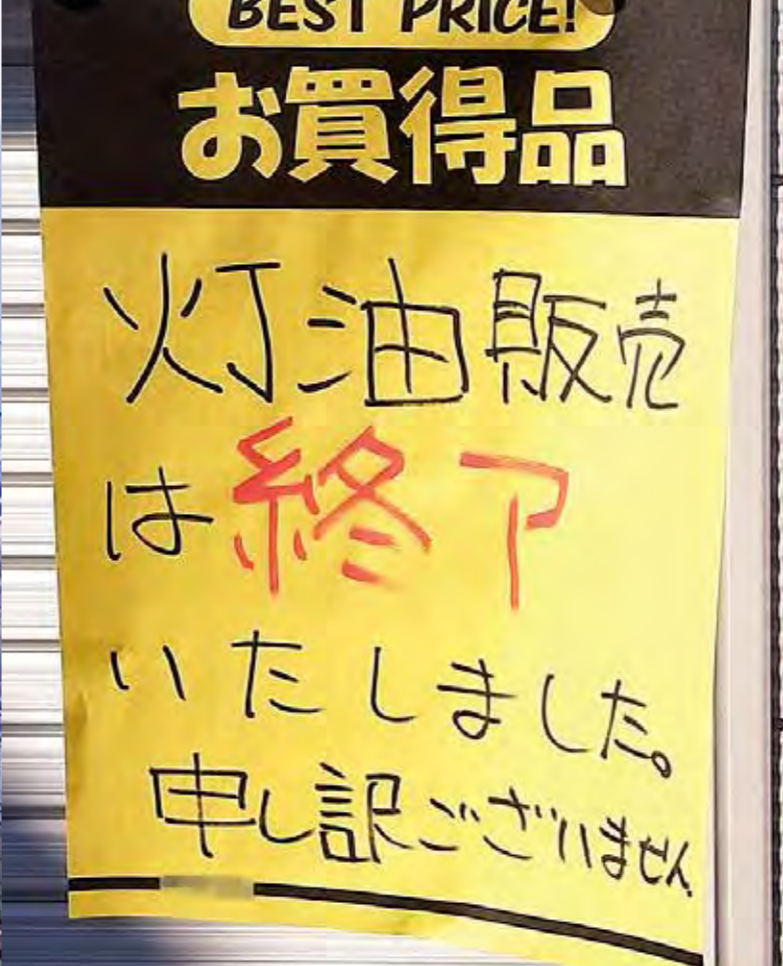
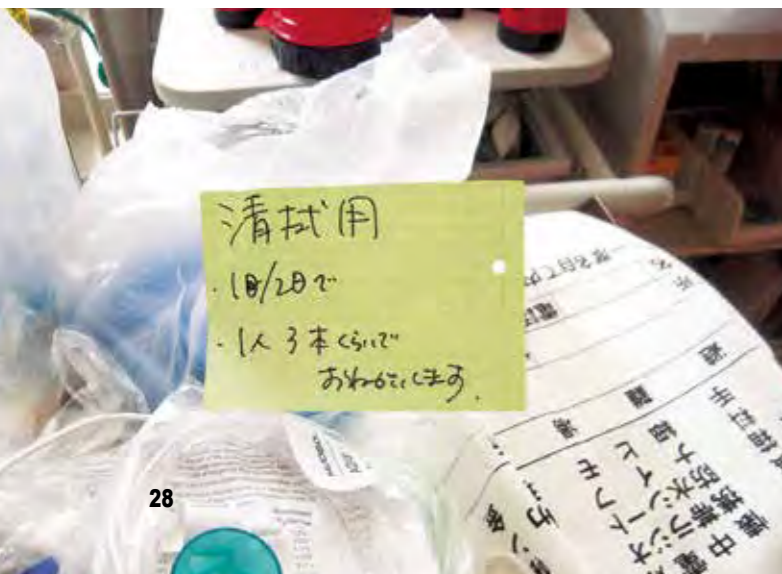


臨時ヘリポートは、夜間照明のないグラウンド。DMAT・消防車両のヘッドライトの点灯のほか、複数の投光器による照明を利用した(3月13日)

断水、 燃料の供給なし



断水時点での大学貯水槽の保有水量は1日分(約700トン)で、長期断水の懸念があることから学部への給水を停止し、徹底した節水(飲用や医療用洗浄以外の洗面、シャワー、トイレ洗浄などの制限)に努めた。病院機能、特に透析、生化学検査、滅菌洗浄、患者食調理などに大きな支障が出た。水道は1週間後の3月18日に復旧した。

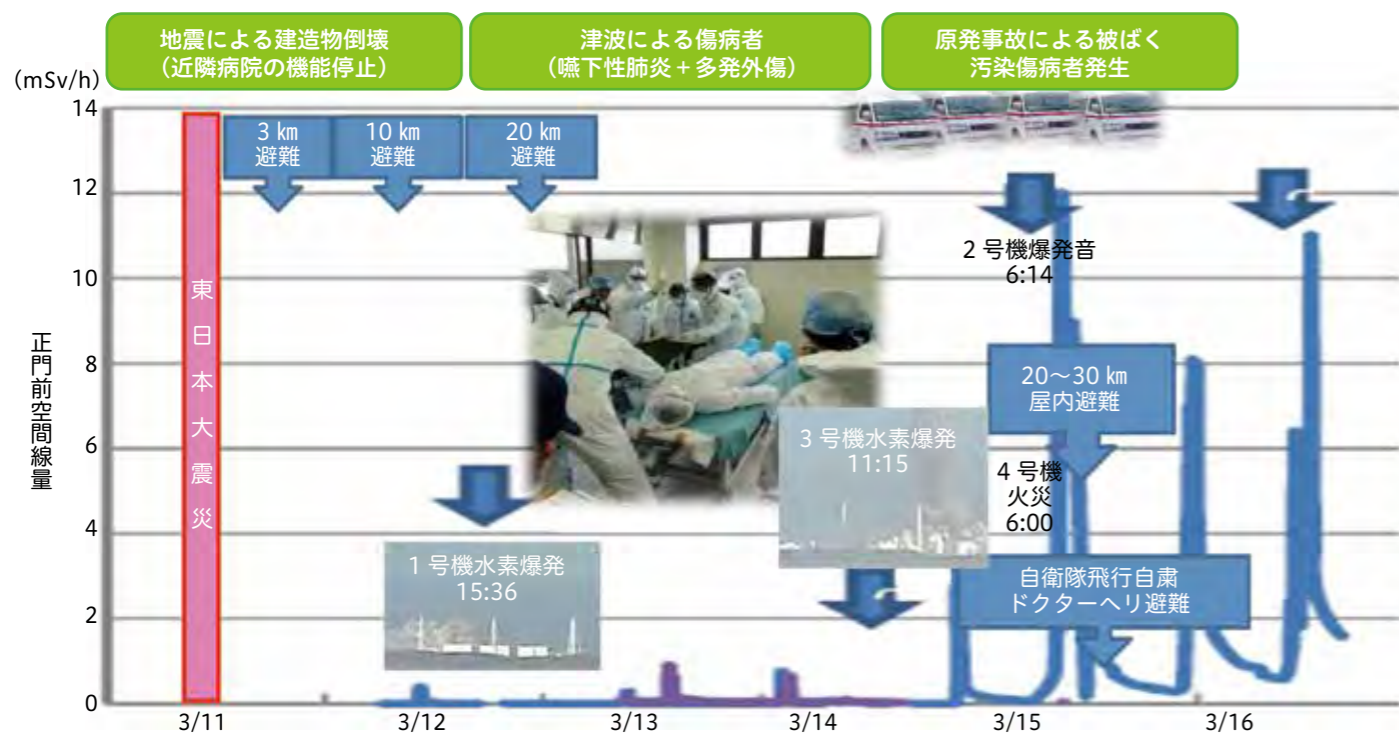
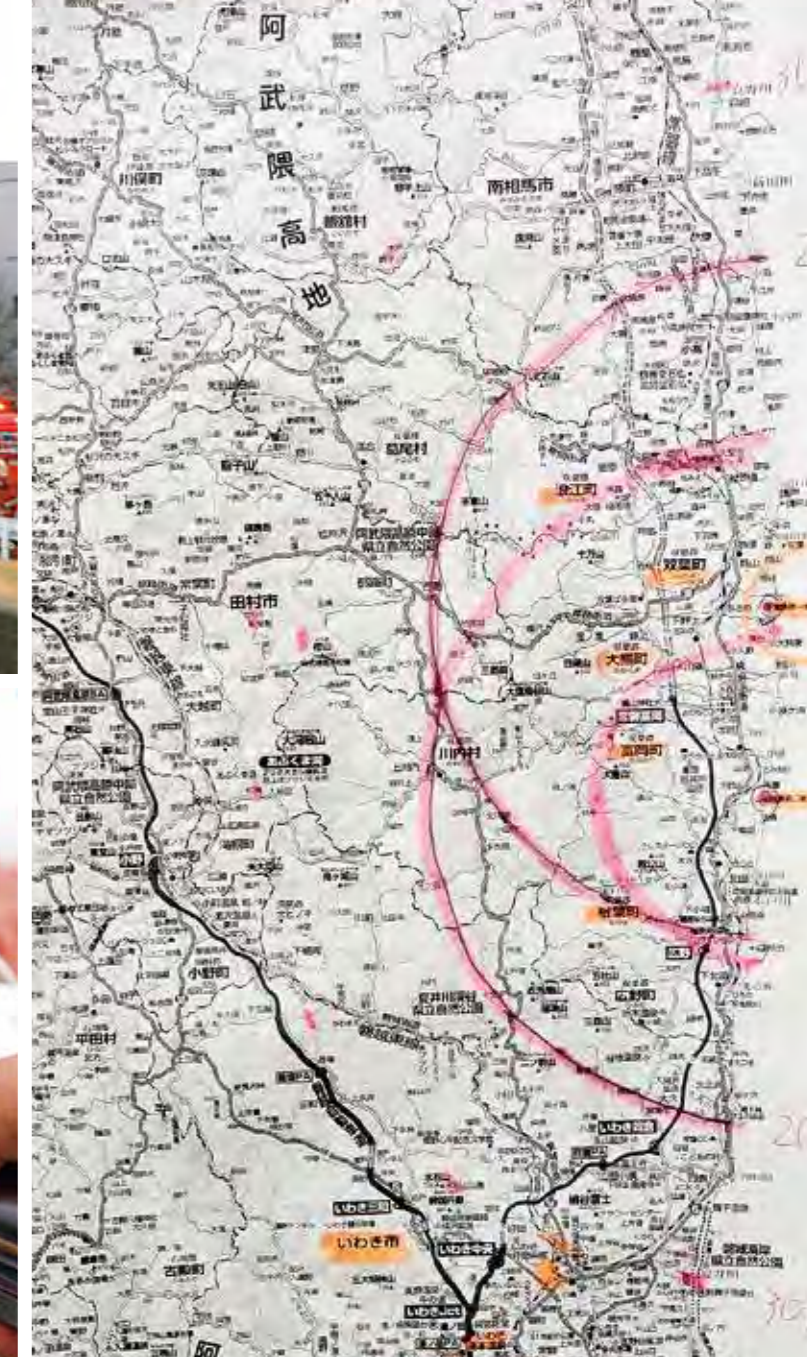


附属病院食堂では、震災当初は節水のため食事が提供できず、おにぎりなどを販売していたが、さらに水節約のため炊飯や食器の洗浄ができなくなり、食材だけを病院食堂で多くの人々に販売した

原子力災害 科学の限界



写真：東京電力提供



- 2011年3月11日「東日本大震災」**
- 1999年9月 JCO臨界事故
 - 2001年3月 福島県立医科大学病院に「除染棟」落成
 - 2002年3月 福島県緊急被ばく医療対策連絡会議
 - 2002年5月 「被ばく医療活動対応マニュアル」制定
 - 2003年5月 「福島県緊急被ばく医療マニュアル」
 - 3月14日 除染棟での緊急被ばく医療開始
 - 3月15日
 - ① 左腕神経叢引き抜き損傷疑い(42歳男性)
 - ② 右足挫創(23歳男性)
 - ③ 左下腿挫創(34歳男性)
 - ④ 左下腿挫創(47歳男性)
 - 3月16日 ⑤ 右胸腹部挫傷(30歳男性)
 - 3月23日 「除染棟」→「緊急被ばく医療棟」に改名
 - 3月24日 「院内被ばく傷病者医療手順」発行
 - 3月25日 ⑥ 両下腿放射線皮膚障害疑い、内部被ばく疑い(27歳男性)
 - ⑦ 両下腿放射線皮膚障害疑い(34歳男性)
 - ⑧ 両下腿放射線皮膚障害疑い、内部被ばく疑い(32歳男性)
 - ⑨ 帯状疱疹(67歳男性)
 - ⑩ 内部被ばく疑い(24歳男性)
 - ⑪ 内部被ばく疑い(29歳男性)
 - ⑫ 内部被ばく疑い、田の水誤飲(31歳男性)

当院被ばく医療の変遷

「コミュニケーション」「エデュケーション」確立のための努力／緊急被ばく医療チーム(長崎・広島大学)／院内緊急被ばく医療体制の再構築

被ばく医療は突然に始まった

3号機原子炉建屋水素爆発。

サイト内で建屋コンクリート片に打たれた傷病者が発生。詳細不明。福島医大病院に救急搬送。院内マニュアルを参照しつつ放射線科・救急科共同で対応した。



JAEA の表面汚染検査バスと JAEA シャワーバス

原子力災害第2次緊急医療施設

除染テント

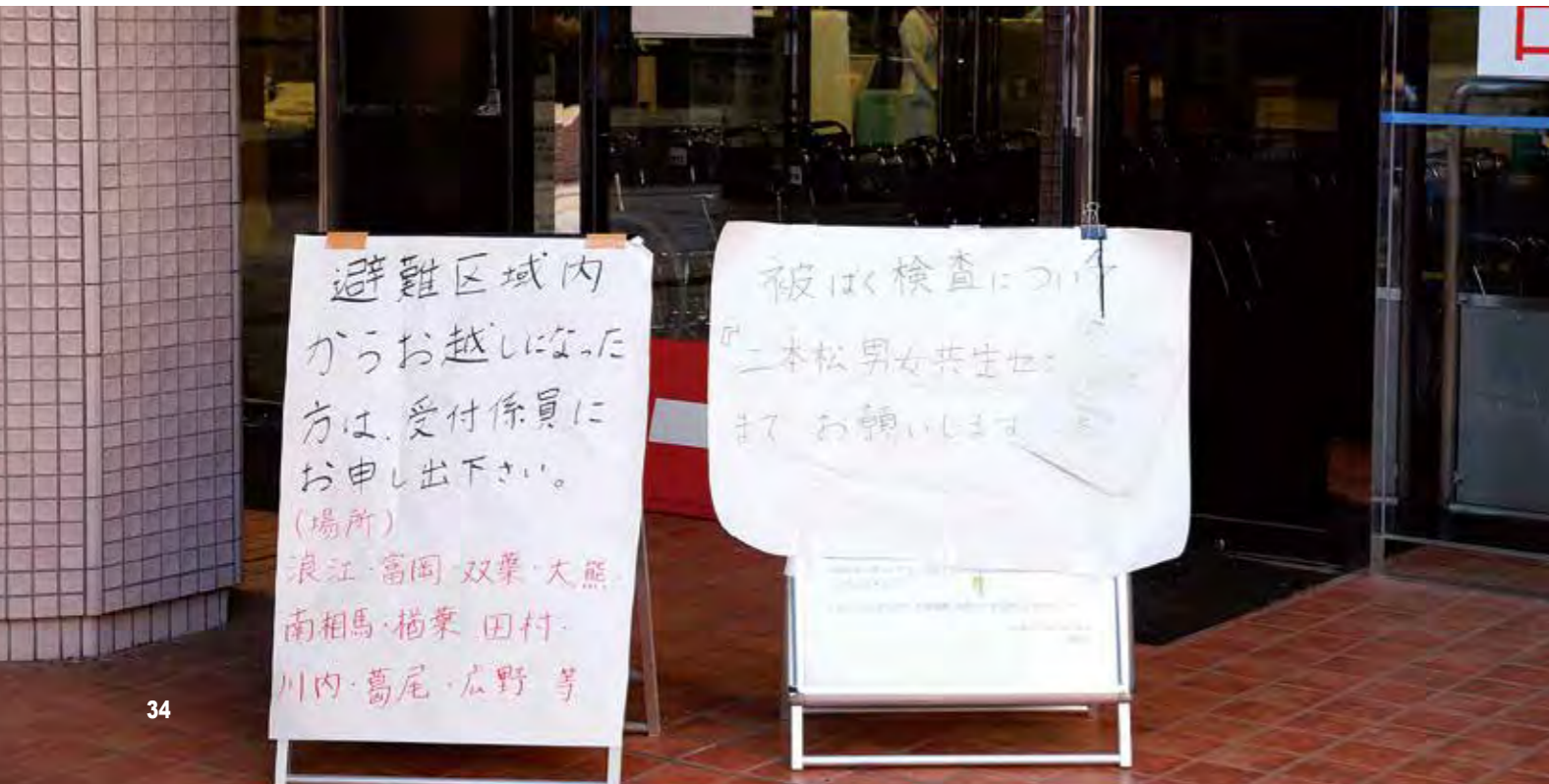
3月12日～県災害対策本部から 避難指示区域にある病院などの 入院患者受け入れ要請

3月14日の夕方から15日早朝、
避難区域患者受け入れ及び移送開始



避難区域の病院から患者搬送を終えた自衛隊車両

自衛隊のヘリコプターで搬送されてくる患者を待つ。
附属病院は外傷患者の受け入れから原発事故避難
区域の患者受け入れに体制を変えていった。



避難区域内
からお越しになった
方は、受付係員に
お申し出下さい。
(場所)
浪江・富岡・双葉・大熊
南相馬・楢葉・田村・
川内・葛尾・広野等

被ばく検査につい
て二本松男女共生会
までお願いします



患者移送のため列をなす各地の救急車

大規模域外患者搬送

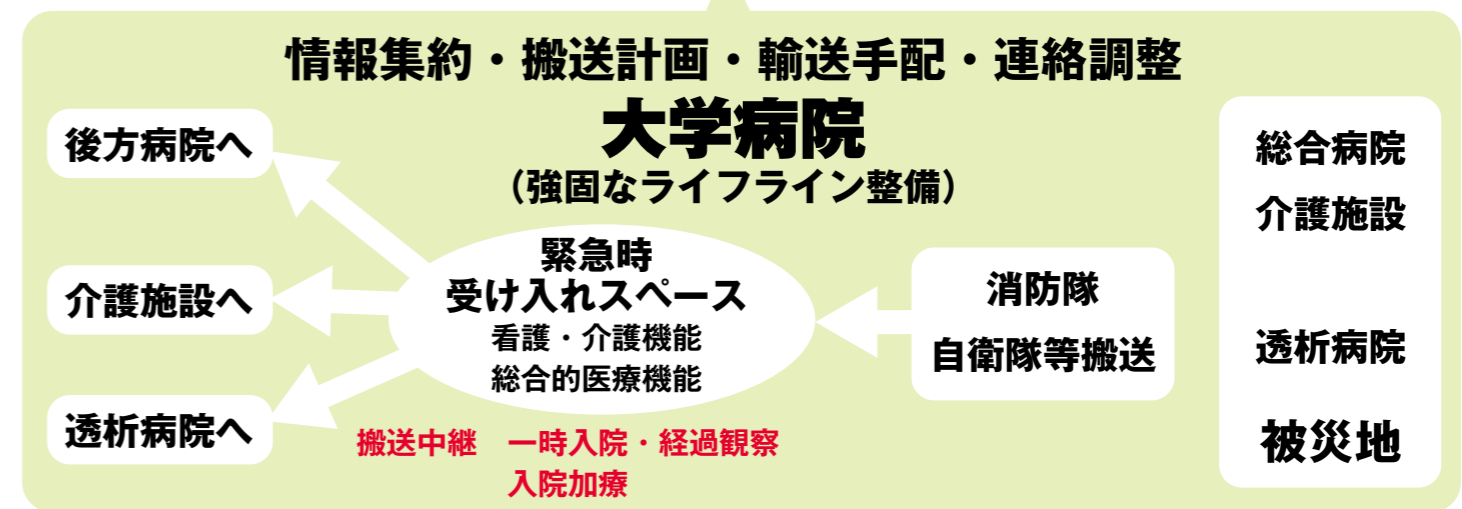
福島医大は県内各地や他県への患者搬送の拠点・中継地点となった。患者さんを一時収容し、搬送可能であれば搬送したが、搬送困難者は入院となった。



大災害時の患者・要介護者搬送

—ハブとしての大学病院機能の重要性—

県災害対策本部+大学病院医療班



仮設ベッドが並ぶ1階ロビー。搬送されてきた患者の容態を確認し、必要な処置を行い、転院搬送か入院加療かを判断する

玄関トリアージ



3月14日から24日まで来院患者や面会者に対し、病院敷地入り口に看護師と事務職員が立ち、車を止め、外来受診患者や面会者の制限を行っていることを説明し、診察の必要性を判断する玄関トリアージを行った。



被災地から一時避難されてきた患者さんの入院が増加し、外来看護師も病棟の応援に入り、体位交換や食事介助を行った



正面玄関放射線チェック



内科外来での対応



原爆被災地からの応援 REMAT来院

3月15日、長崎・広島大学合同 REMAT が加わる。

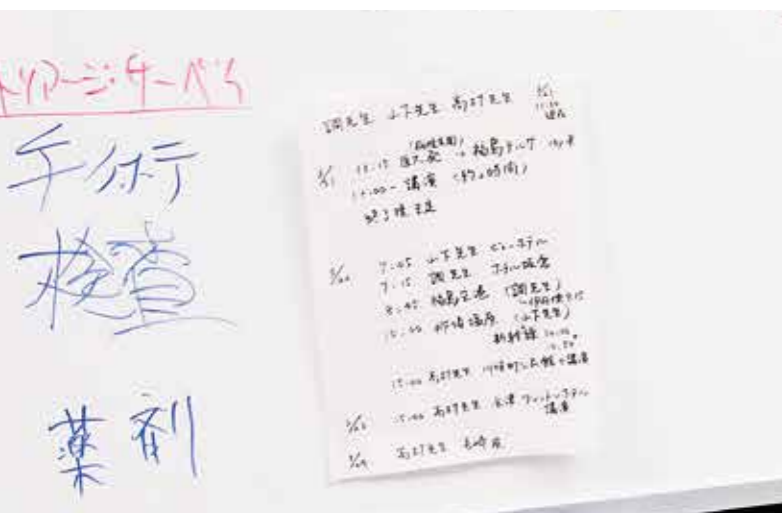


原爆被災地からの緊急被ばく医療初期支援の動き

原発事故の情報が錯綜する初期に、広島大学、長崎大学からの緊急被ばく医療支援チーム (Radiation Emergency Medical Assistance Team; REMAT) が、20km圏外への避難指示が出る中、自衛隊のヘリで福島医大に入ったのは空間線量率が福島市で急上昇した3月15日でした。20~30km圏内が屋内避難という新たな指示が出たにもかかわらず原発サイトの情報が乏しく、外部支援の立ち入り制限も加わり、危機管理の齟齬が現場を翻弄していました。ヨウ素剤の服用の可否も混乱していました。水も出ずまさに不安と混迷の渦中で、医大そのものが孤立無援の状況になりつつありました。この頃、原発からの汚染傷病者が福島医大に搬送されたことを契機に、福島医大、REMAT、自衛隊、JAEAとの共同作業で、除染車や測定者の手配から除染テント等の設置が寒い中で行われ、多数傷病者対応に向けたマニュアル作りも進んでいました。しかし原子力災害クライシス時の医療機関や公共機関の様々な決断を如何に行うべきかというコミュニケーションが全くなされておらず、もし政府や行政が混乱してできないならば、被ばく医療の経験のある大学としてできるだけのことは行いましょうという内容の連絡を長崎大学から先に支援に来ていた先生より受けました。

私自身、3月17日夜、菊地臣一理事長から携帯電話へ直接支援の要請があり、18日福島空港に降りましたが、入る人は少なく逆に脱出を試みる人たちが混雑していました。道路や町中は閑散として、唯一ガソリンスタンドが長蛇の車の列でした。病院長室の災害対策本部は1週間の激務で皆が疲労の色を濃くしていました。現状掌握が困難な中で、地域医療の皆たる責務を果たす必要性と、原発事故の国内外の対応経験を幹部にお話させて頂きました。夜は病院職員へ他の長崎大学からの専門家と共に放射線被ばくの対応について話をしました。オールジャパンでの支援体制が不可欠な事から、長崎大学の片峰茂学長にお願いし、4月1日には異例の早さで福島医大と長崎大学、そして広島大学の三者が学術交流協定書を締結しました。同日には国内放射線影響研究協議会の関係者にも医大に集って頂き、全面支援を約束頂きました。当初は原発安全神話と後手後手の政府対応の弊害もあり、情報不足と理解不足への説明や解説が主でしたが、その後の情報過多やイデオロギーによる社会の混乱により、医療人と社会との新たな信頼関係構築が求められています。初期の福島医大の被ばく医療を支えた仲間達が放射線災害医療センターを立ち上げ、よらず健康相談事業にも奔走中です。

(福島県立医科大学 副学長 山下俊一)



3月18日、放射線医療の専門家である長崎大学・山下俊一教授をアドバイザーに迎えた。「傾聴」と「適切な被ばく医療の知識」を核とした危機介入により、崩壊寸前であった福島医大の士気は回復し、文字通り再生した

Table 1. Radioactivity in Beach sands (Bq/g)

	Tamil Nadu				Nagasaki		
	M0	M1	M2	M3	BSS	YBS	
Thorium series							
1	Ac-228	7.54	35.40	26.90	40.80	0.00584	0.00368
2	Th-228	14.00	38.60	33.70	43.70	N.D.	N.D.
3	Ra-224	7.91	33.90	22.70	37.40	N.D.	N.D.
4	Pb-212	8.43	35.10	23.70	38.70	0.00619	0.00408
5	Bi-212	8.69	40.30	25.90	40.20	0.0133	N.D.
6	Tl-208	2.38	11.00	7.17	11.50	0.00139	0.00106
Uranium series							
7	Pa-234m	2.91	12.20	12.50	15.90	N.D.	N.D.
8	Ra-226	1.65	5.69	3.92	9.34	0.0787	0.0461
9	Pb-214	1.20	4.81	2.85	4.66	0.00467	0.00372
10	Bi-214	1.08	4.34	2.90	4.53	0.00525	0.00358
Actinium series							
11	U-235	N.D.	0.19	0.15	N.D.	N.D.	N.D.
12	Th-231	2.60	7.19	6.28	8.12	N.D.	N.D.

吉田ら、日本放射線影響学会 (2009, 広島)





助け合おう、日本。
がんばろう、東北。
がんばるぞ、福島!

福島医大病院・心身医療科
福島医大・神経精神医学講座
東北関東大震災・福島医大・こころのケア・チーム

心のケアボランティア
Center

笑顔がきずなに

大地震発生当日

2011年3月11日(金)14時46分。地震発生時、臨床研究棟5階の耳鼻咽喉科学講座の私の部屋にいた。今までに感じたことのない横揺れで、書棚の本や書類がどんどん落ちてきた。書棚は倒れそうになったので押さえていた。ドアを開けて逃げ道を確保して廊下に出ると、となりの講座から水道管が破裂して水が流れ出る音がしていた。また別の方向から、ガスが漏れるようなシューという音が聞こえてきた。耳鼻咽喉科の研究室では水漏れやガス漏れがないようであった。揺れは5～6分続いた。ビルが折れて倒れるような感覚であった。周囲にいた者とビルの外に出ることにした。1階まで降りて中庭からビルを見ると余震がくるたびに揺れているように見えた。

病院長室に直行した。病院長は不在でもう一人の副病院長がすでに来ていた。病院としてただちに災害対策本部(災害医療対策部)を設置した。場所は病院長に無断で病院長室とした。テレビがなかったので他の部屋からテレビを持ってきて配線をつないでもらった。テレビの情報が一番早い。病院経営課長、看護部長、大学施設主幹を中心に、まず、入院患者、外来患者、職員の安否と設備の被害状況について情報收拾を図った。大きな紙に一つずつ書いていった。外壁の亀裂、水漏れ、天井の破損、床のひび割れ、空調吹き出し口落下などが報告されたが、幸い人的被害はないことがわかった。エレベーターがストップしたが幸いエレベーター内に閉じこめられた人はいなかった。余震が続く中、入院患者は病室へ、外来患者は病院の外へ誘導した。入院患者で車いすやストレッチャーにのった人は、人手を集めて病室に運んだ。余震頻回のため、手術中の患者は中断できるところで終了指示し、夕方に無事全員退室した。15時46分、全館放送で、人的被害がないこと、大きな物的被害はないこと、ライフラインの状態、救急患者のトリアージの場所を知らせた。

18時30分、災害対策本部にて、副病院長3名、救急科医師、病院事務担当者で今後の対応についてミーティングを行った。電気、ガスは供給されていることを確認したが、上水道の供給停止の知らせが入った。21時30分から病院の各部署の責任者に集まってもらい全体ミーティングを開いた。ここでは被害状況、ライフラインの現況を報告し、当面の救急対応、各部署のバックアップ体制について意見を集めたうえで決定した。日が変わって午前0時から2回目の全体ミーティングを開いた。1次、2次、3次救急体制について、トリアージの場所と担当科を確認した。翌週の一般外来を閉じること、予定手術を止めること、日曜日の予定入院を止めることを確認した。この時点での連絡では福島第一原発、第二原発ともに水位は安定しており、すぐには放射能漏れの恐れはないとのことであった。本院は災害拠点病院であり、全国からDMAT(Disaster Medical Assistance Team)35チーム、約180名が集結してきたが、数日して岩手県や宮城県に移動した。

「地震・津波・原発事故における災害医療：前線基地としての大学病院」
福島県立医科大学附属病院副院長 大森孝一(2011年6月9日 日本頭頸部癌学会「東日本大震災報告会」)より

福島県立医科大学 震災特設ページ

(http://fmu.ac.jp/index_shinsai.php)

東日本大震災に直面し、福島県立医科大学は県民の救済に真正面から取り組み、そしてこれからも闘い続けようとしています。地震当日に入院患者さんの安否をホームページに掲載してから、刻々と移り変わる状況を的確に伝えてきました。

2011.3.11

■ 本学附属病院の入院患者さんの状況について

本日の地震において、本学附属病院の入院患者さんの安全は確認しております。

■ 後期試験延期について

今回の地震により、本学医学部・看護学部とも後期試験の実施は延期します。3月13日(日)にも実施はしません。実施の時期については未定ですが、決まり次第HPに掲載します。詳細は学生課入試係 024-547-1093 までお問い合わせください。

2011.3.12

■ 医大病院の受診について

福島県立医大附属病院は現在、重傷者の受け入れ、治療に全力を挙げて行っております。軽症の方は受診をひかえていただくようお願いいたします。



2011.3.13

■ 平成22年度福島県立医科大学看護学部「臨地実習教育会議」について

この度、3月11日(金)に発生した東北太平洋沖地震のため、3月16日(水)13時30分から本学にて開催予定であった「臨地実習教育会議」について、開催を取りやめることとなりましたので、お知らせいたします。今後も開催はしない予定です。平成23年度の各実習についての打合せ等は、後日、別途、本学部各領域の実習担当教員よりご連絡をする予定でありますので、よろしくお願いたします。

2011.3.14

■ 条件付一般競争入札の日時変更について (委託関係6件)



■福島医大附属病院を受診される方に

当病院は重症患者に特化して、診療を行っています。
 一般の方の診療（予約診療を含む）は原則として行いません。
 被災地の患者さんは医師の処方せんがなくてもご利用の薬局で医薬品が購入できます。
 災害医療にご協力をお願いします。

■本学後期日程試験の中止について

志願者各位
 今回の大震災により、本学医学部・看護学部一般入試後期日程試験の本学独自の試験は実施せず、大学入試センター試験の結果と調査書により入学者を選抜することとしました。
 合格者については、受験番号を本学構内に掲示するほか、本学ホームページに掲載し、郵送で通知します。
 なお、地震により被害を受けた志願者については、例外的に本人または保護者からの電話での問い合わせを受け付けます。
 ・合格発表【日時】 3月20日(日)午前10時頃
 【掲示場所】医学部：医学部講義棟前掲示板
 看護学部：看護学部棟前掲示板・電話での合否確認
 3月24日(木)、3月25日(金)の9:00～17:00（願書記載内容を確認させていただきます）
 また、入学手続等の日程は当初の予定どおりですが、やむを得ない事情により、期限内に入学手続が行えない場合は早めにお問い合わせください。
 ・入学手続 3月22日(火)～3月25日(金)
 ・追加合格 3月28日(月)～3月31日(木)
 お問い合わせ先 〒960-1295 福島市光が丘1番地 福島県立医科大学
 学生課入試係

■学位記授与式の中止について

今回の大震災により、本学の学位記授与式は中止します。
 学位記授与式への出席を予定された皆様には大変申し訳ありませんが、なにとぞご理解とご協力をお願い申し上げます。

■福島県立医科大学新規採用職員事務説明会の延期について

■「ふくしま医療-産業リエゾン支援拠点」キックオフセミナー中止について

2011.3.16

■条件付一般競争入札(委託関係6件)の実施日を、無期延期とします。

2011.3.17

■平成23年度臨床研修採用予定の皆様へ

福島県立医科大学附属病院では、4月1日からの臨床研修開始に向けて当院及び関連病院総力をあげて取り組んでいます！
 ※各個人へメールでご連絡いたします。

■Fukushima Medical University's response to the March 11 earthquake and subsequent disasters

2011.3.18

■PCが閲覧不可な方のために、震災用緊急モバイルサイトを開設しました。震災発生日以降の当欄掲載情報が携帯からもご覧いただけます。(http://www.fmu.ac.jp/univ/m/)

■休校期間及び平成23年度の入学式の日程等について

今回の原子力発電所の事故及び東北地方太平洋沖地震に係る対応のため、下記のとおりといたします。
 1 休校の期間 平成23年4月末まで
 2 入学式
 日時 平成23年5月6日(金)午前10時～
 場所 本学講堂
 3 新学期開始 平成23年5月9日(月)
 ※上記の内容は、3月18日に本学HP (http://www.fmu.ac.jp) に掲載します。

■福島県立医科大学新規採用職員事務説明会の再延期について

2011.3.20

■看護学部前期日程試験合格者受験番号を掲載しました 医学部後期日程試験合格者受験番号を掲載しました。

合格発表は、本学8号館前の掲示板に合格者受験番号を掲示するほか、合格者には合格通知書を郵送しています。
 ホームページでの発表は、参考情報としてご覧ください。

2011.3.21

■福島医大病院を受診される方に

福島県立医科大学附属病院は3月22日より、次の内科系診療科のみ外来診療を再開します。
 なお、当面は当日の予約患者のみの対応といたします。
 循環器内科、血液内科、消化器内科、リウマチ・膠原病内科、腎臓・高血圧内科、糖尿病・内分泌代謝内科、神経内科、呼吸器内科、小児科、心身医療科、放射線科、産科



自衛隊マンパワー



福島第一原発から20km圏内の入院患者らの圏外搬送は自衛隊ヘリコプターも用いられた。過去に例のない広域搬送であった。





原発事故対応

除染機能を確保、放射線防護策と汚染拡大防止対策の整備

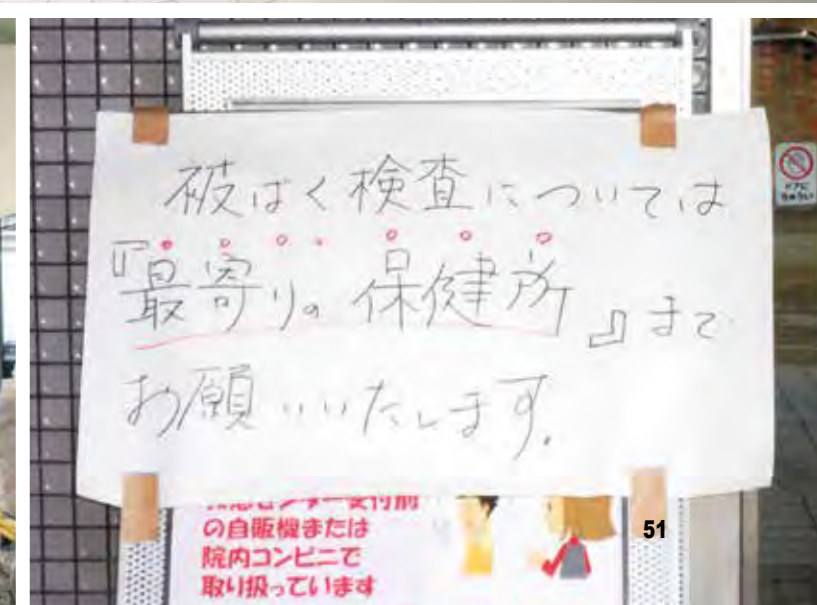
高度被ばく者12名除染、3名入院、被災者放射線サーベイ約500名



除染テント



移動式簡易浴槽



医療チームが巡回診療



心のケアチームは最初から心の問題を取り上げるのは困難なことから、身体症状を訴える患者さんにも充分対応した

東京電力福島第一原発事故による風評被害で医薬品の物流が滞るなど、医療体制が弱体化している、いわき市の医療機関を支援するため、3月28日から内科や小児科などの医師らでつくる医療チームを同市の避難所に派遣した。高齢者や子供の医療ニーズに対応したほか、感染症の治療などを行った。



災害の大きさを
再度実感

薬の空箱
は、返却
お願ひします。
※再利用します。

薬は、必ず
リストに記入
帰ったら
未使用薬と
リストを返却
して下さい。



いわき地区に向かうバスの中



一見問題がなさそうに見える人でも、ていねいに話を聞くと多くの問題を抱えていた



原発事故医療班が常駐したJヴィレッジ



Jヴィレッジは、東京電力福島第一原発事故に伴い、2011年3月15日以降スポーツ施設としては全面閉鎖し、国が管理する原発事故の対応拠点となり、重要な医療拠点となった。福島第一原発から18km南に位置し、陸上自衛隊のヘリコプターおよび隊員が放射性物質を落とす除染場所となるなど、全作業員が通過する災害現場への玄関口である



心のケア
チラシ
自由におとり
下さい
↓
こころの健康相談
ダイヤル
0570-064-556
心の相談緊急電話

医療チームの
巡回サービス
日時：4/13(水)
13:30～15:00
場所：各部屋を回ります。
医療チーム：福島県立
医科大学
小児科・眼科・耳鼻科
感染症関係（計6名）
担当：上田氏 (TEL 024-547-1013)

高度医療緊急支援チーム

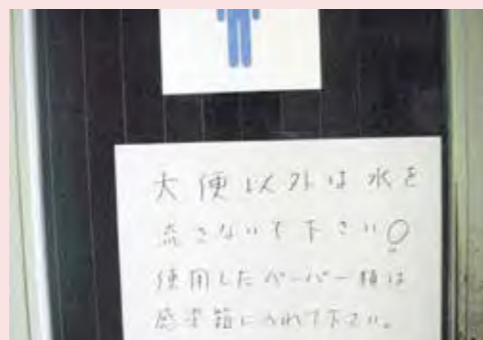
対象	避難所など（活動範囲を県内全域に拡大）
構成	<ul style="list-style-type: none"> エコノミー症候群、循環器疾患、こころのケア、小児・感染対策のリスク症例の診療などを行う4つの支援チーム 避難所での保健師活動を支援する避難所保健支援チーム 脳疾患、心臓病、呼吸器疾患、糖尿病、腎臓疾患などの困難例に対応可能な専門電話相談を行うコンサルテーションチーム 避難所の感染予防などの専門的課題に対する医大案を示す専門的アドバイスチーム
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> 地元医師会や日本医師会災害医療チーム（JMAT）、保健所からの情報に基づき、長期の避難所生活により発生が懸念されるハイリスク症例のケア、専門病院の紹介、移送手配など エコノミー症候群医療チームは5月11日の活動終了までに、検査実施約2200人中、約10%に血栓あり。また、4月25日より、ヨルダン王国チーム（血管外科医2名、看護師兼超音波検査技師2名）が合流 小児・感染チームは6月2日の活動終了までに延べ31か所の県内各地の避難所を巡回し、乳幼児の健康管理のアドバイスなどを行った。また、5月9日よりタイ王国医療チーム（医師2名、看護師2名）が合流 循環器疾患チームは4月7日をもって活動を終了した。 こころのケアチームは、平成24年3月まで活動を継続した。

20～30km圏内在宅患者支援チーム

対象	居宅住民
構成	福島県立医科大学地域家庭医療学講座、長崎大学、長崎県医師会、自衛隊衛生班、南相馬市立病院看護師など
活動内容	6月末の活動終了までに圏内に居住する約150名の患者の訪問、医療支援など

大地震から2週間

救急患者は3日間で緑93名、黄44名、赤30名、黒1名の合計168名であった。多くは浜通りからの患者さんであった。水の供給が止まると、病院機能が止まる。透析ができない。生化学検査ができない。滅菌洗浄ができない。患者食ができない。トイレは流せない。手は洗えない。透析患者が喫緊の問題で、救急車やバスで東大病院など他県の施設に移送した。水なしで使える血液ろ過用補充液サブラットなど緊急医薬品の必要性を痛感した。3月25日に頭頸部癌学会理事長と頭頸部外科学会理事長名で頭頸部がん患者の受け入れ情報が送られてきた。郡山市の太田西ノ内病院ではこの制度を利用して頭頸部がん患者を送った。時宜を得た適切なお支援に感謝したい。



原発の水素爆発などにより浜通りから多くの避難民が発生した。浜通りの病院に入院中の患者は自衛隊の救急車やヘリコプター、全国の自治体からの応援の救急車、バスなどで、次々と送られてきた。電話が通じないので、来る、来ない、いつ来るんだ、やっぱり来た、など情報が錯綜し混乱した。衛星電話がつながりやすかった。本院では多くの避難患者が来てても良いように外来玄関待合スペースや看護学部にベッドを並べておいて、到着した時点で収容していった。真夜中になることも早朝になることもあった。いわきや相双地区14病院の搬送対象者は約1300名あり、搬送中継トリアージ対象者は175名、うち入院は125名であった。原発から放射性物質飛散により、約500名の放射線サーベイを行った。本院は原子力災害第二次緊急医療専門施設であり除染施設や体内被ばく線量等の検査設備を有している。ただ、設備は一つしかないので一度に数十人来てても対応できないため、自衛隊の除染車やタンク車が常駐していた。広島大学や長崎大学からREMAT (Radiation Emergency Medical Assistance Team) など多数の放射線専門家が応援に来ていただいた。

1週間は職員は風呂に入れず、おにぎりやカップラーメンとペットボトルのお茶だけで過ごした。町のスーパーやコンビニから商品が消えた。ガソリンもなかったので遠くに行き出しにも行けなかったし、通勤も難しくなってきた。この間の患者食は備蓄してあったのでほぼ通常の食事を提供することができた。病院内で一番のごちそうであった。検食係がこれにありつけた。3月18日(金)に上水道が開通した。ちょうど講演会中でみんなから大きな歓声が上がった。前線から一歩も引かずになんとか持ちこたえることができた。復旧があと3日遅かったら病院機能は停止しお手上げの状態であったであろう。

「地震・津波・原発事故における災害医療：前線基地としての大学病院」
福島県立医科大学附属病院副病院長 大森孝一(2011年6月9日 日本頭頸部癌学会「東日本大震災報告会」)より

2011年3月22日から同年3月30日までの 福島県立医科大学 震災特設ページ

(http://fmu.ac.jp/index_shinsai.php)

2011.3.22

■女性のための臨時健康相談室の開設について

1 目的 東北・関東大震災の影響で、健康に不安を抱えている女性を対象に電話による健康相談を実施する。

2 相談日

3月22日(火)	9:00~17:00
3月23日(水)	9:00~17:00
3月24日(木)	9:00~17:00
3月25日(金)	9:00~17:00
3月28日(月)	13:00~17:00
3月29日(火)	9:00~17:00
3月31日(木)	9:00~17:00
4月1日(金)	9:00~17:00

3 相談電話 024-547-1407

4 担当医師 性差医療センター長 小宮ひろみ

5 費用 無料

■福島県放射線健康リスクアドバイザーによる講演会(3月21日・福島テルサにて開催)が動画でご覧いただけます。(福島県ホームページにジャンプします)

■無期延期となっていました条件付一般競争入札(委託関係6件)の入札を、3月25日(金)に実施します。

2011.3.23

県民の皆様へ

3月11日に本県を襲った巨大地震とそれに続く大津波によりまして、お亡くなりになった方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様、そして避難生活を余儀なくされている皆様に心からお見舞いを申し上げます。

本学は、地震発生後速やかに災害対策本部を設置して、被災された皆様の受け入れ態勢を附属病院に整備し、特に重症の患者さんへの対応を行ってまいりました。この間、外来診療の制限や入院患者さんへの面会制限など、皆様に御不便をおかけしながら、私どもは県内唯一の医大附属病院としての役割を果たしてまいりました。県民の皆様の御理解と御協力に深く感謝申し上げます。

昨日、ようやく外来診療を一部再開いたしましたが、福島第一原発の事故が未だ収束していない中では、今後の診療体制についても不透明な部分が残らざるを得ません。引き続き御迷惑をおかけいたしますが、重ねて御理解をお願いいたします。

その福島第一原発で発生した事故は、我が国で誰ひとり経験したことの無い、対処法も確立していない深刻な出来事です。しかし、連日報道されておりますとおり、自衛隊や東京消防庁の方々が駆け付け、さらに多くの人たちが事態の早期収束に向けて全力で取り組んでおります。

県内の医療関係者を始め、県民の皆さんにおかれましては、いたずらに不安を抱いたり、不正確な情報に惑わされたりすることなく、ぜひ正しい知識に基づく冷静な判断をお願いいたします。

福島県民にとって、今、そしてこれからがまさに正念場です。しかし、どんな困難も克服することができる知恵と勇気と不屈の精神が、本県民には備わっています。どんなに長くても夜は必ず明けます。本学も全力で県民の医療を支えてまいります。持てる力を結集し、一日も早い復興に向けて、そしてより強靱な社会を築くため、前に向かってともに歩を進めてまいります。

平成23年3月23日

公立大学法人福島県立医科大学 理事長兼学長 菊地 臣一
 附属病院長 村川 雅洋

■“Inside Fukushima Medical University: What is happening in the midst of disaster?”

■条件付一般競争入札(平成23年度上期精米)の実施日を無期延期とします。

■福島県立医科大学新規採用職員事務説明会の中止について

2011.3.24

■福島医大病院を受診される方に

福島県立医科大学附属病院は3月24日(木)より、全ての診療科で外来診療を再開します。なお、当面は当日の予約患者のみの対応といたします。

附属病院ホームページ <http://www.fmu.ac.jp/byoin/index.php>

■平成22年度学位記授与者への、学長からのメッセージを掲載しました。

■「学長からの手紙」に本学関係者及び医療職の方々へのメッセージを掲載しました。

2011.3.25

■小児科学講座ホームページに「震災特別ページ」が開設されました。子どもたちのケアに役立つ情報等を掲載しています。

■本学敷地内の外気放射線量リアルタイム計測値の公開について(Radiation levels in the open air at Fukushima Medical University)

■大学院医学研究科学位論文審査申請の受付期限を変更します。

■本学同窓生の皆様へのメッセージを掲載しました。

3月11日に本県を襲った巨大地震と大津波、そしてそれに続いて発生した福島第一原子力発電所の深刻な事故により被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。同窓生の皆様におかれましては、県内外を問わず、この未曾有の災害への対応に奔走されていることと思います。皆様の御努力と御労苦に敬意を表します。

本学では、地震発生後速やかに災害対策本部を設置して、被災された皆様の受け入れ態勢を附属病院に整備し、特に重症の患者さんへの対応を行ってまいりました。この間、外来診療の制限や入院患者さんへの面会制限などを行いながらも、役員や大学幹部、病院幹部が一致団結して事に当たり、県内唯一の医大附属病院としての役割を果たすことができたと考えております。また、県内の情勢、とりわけ福島第一原発の状況は予断を許しませんが、同窓生の皆様や国の機関など、様々な方面から医薬品や生活物資等の御支援をいただき、今週から外来診療を再開することができましたことを御報告申し上げます。

原発の事故が未だ収束していない中では、今後の大学・病院運営にも不透明な部分が残らざるを得ません。すでに本学は、今年度の学位記授与式は中止、来年度の入学式も5月6日に延期という決定を下しておりますが、このような前代未聞の事態の真っ只中にあることは、同門、同窓の皆さんから届く温かい励ましがなにもものにも代えがたい心の支えとなっております。

今後の県内の医療全体を見渡しますと、各医療機関における物資不足や避難者に対する医療の提供体制の問題など、まだまだ課題山積の状況です。こうした中で、本当に頼りとなるのは心の通った仲間である同窓生の皆様のお力だと思っています。県民の医療を守るため、本学は全力でこの困難に立ち向かってまいります。そしてそれを糧として、さらなる高みを目指してまいります。どうか皆様の御支援、御協力をよろしくをお願いいたします。

福島県立医科大学 理事長兼学長 菊地 臣一
 附属病院長 村川 雅洋

■福島県立医科大学新規採用職員の辞令交付式について

2011.3.28

■福島医大病院を受診される方に

福島県立医科大学附属病院は、本日3月28日(月)より、外来診療を通常どおり行います。

2011.3.30

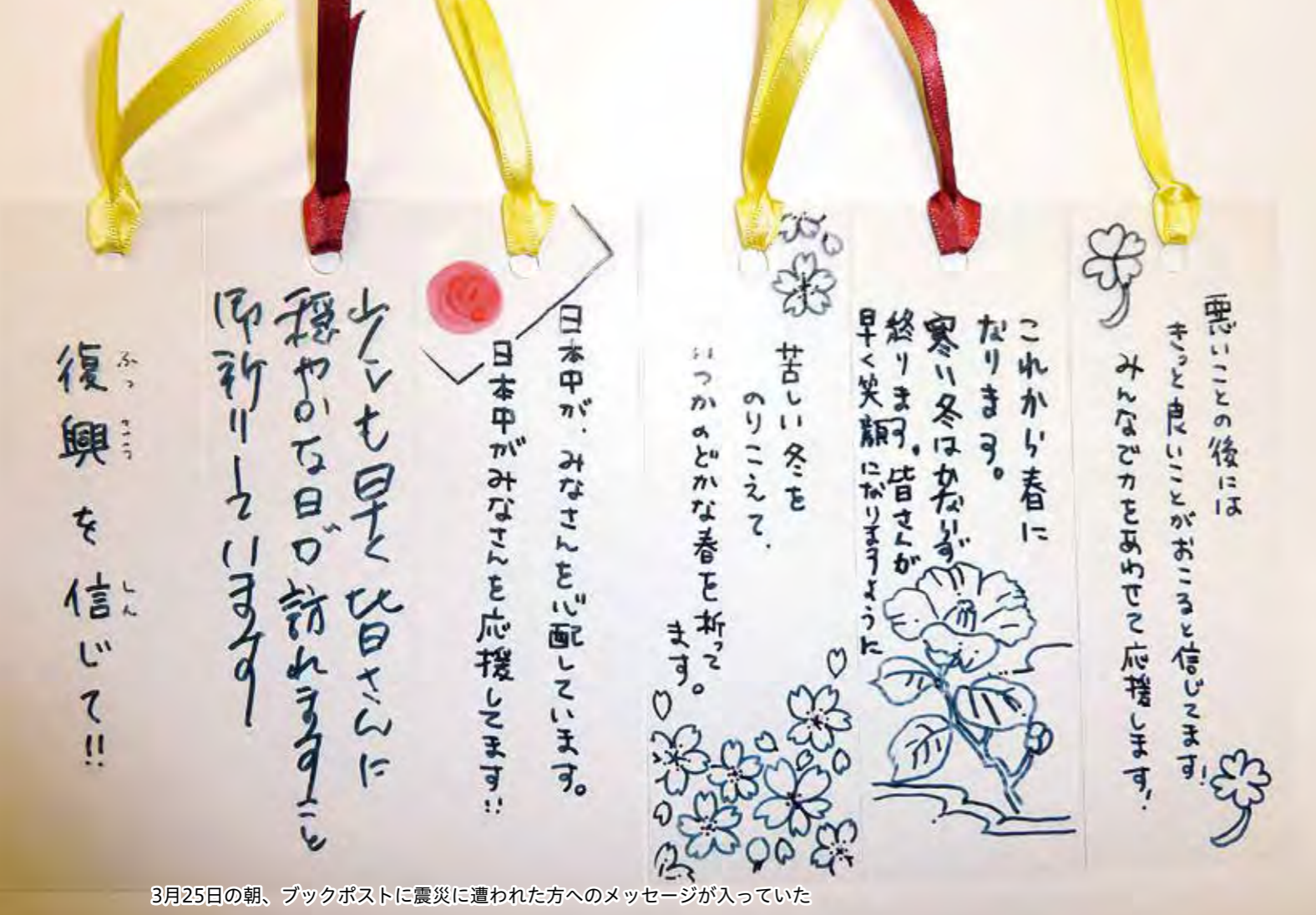
■福島県立医科大学被災支援義援金の受け入れについて

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に際しまして、本学に対し、多くの皆様から激励のお言葉やご支援のお申し出をいただいております。衷心より御礼申し上げます。

こうした中で、皆様のお申し出に迅速にお応えできるよう義援金の受け入れ窓口を設置いたしました。

皆様からのご芳志は、本学の教育・研究環境や附属病院機能の復旧など、本学の復興のため、大切に使用させていただきます。

このような未曾有の大災害に接し、本学の現在及び将来をご心配いただいておりますことに改めて深く感謝申し上げます。



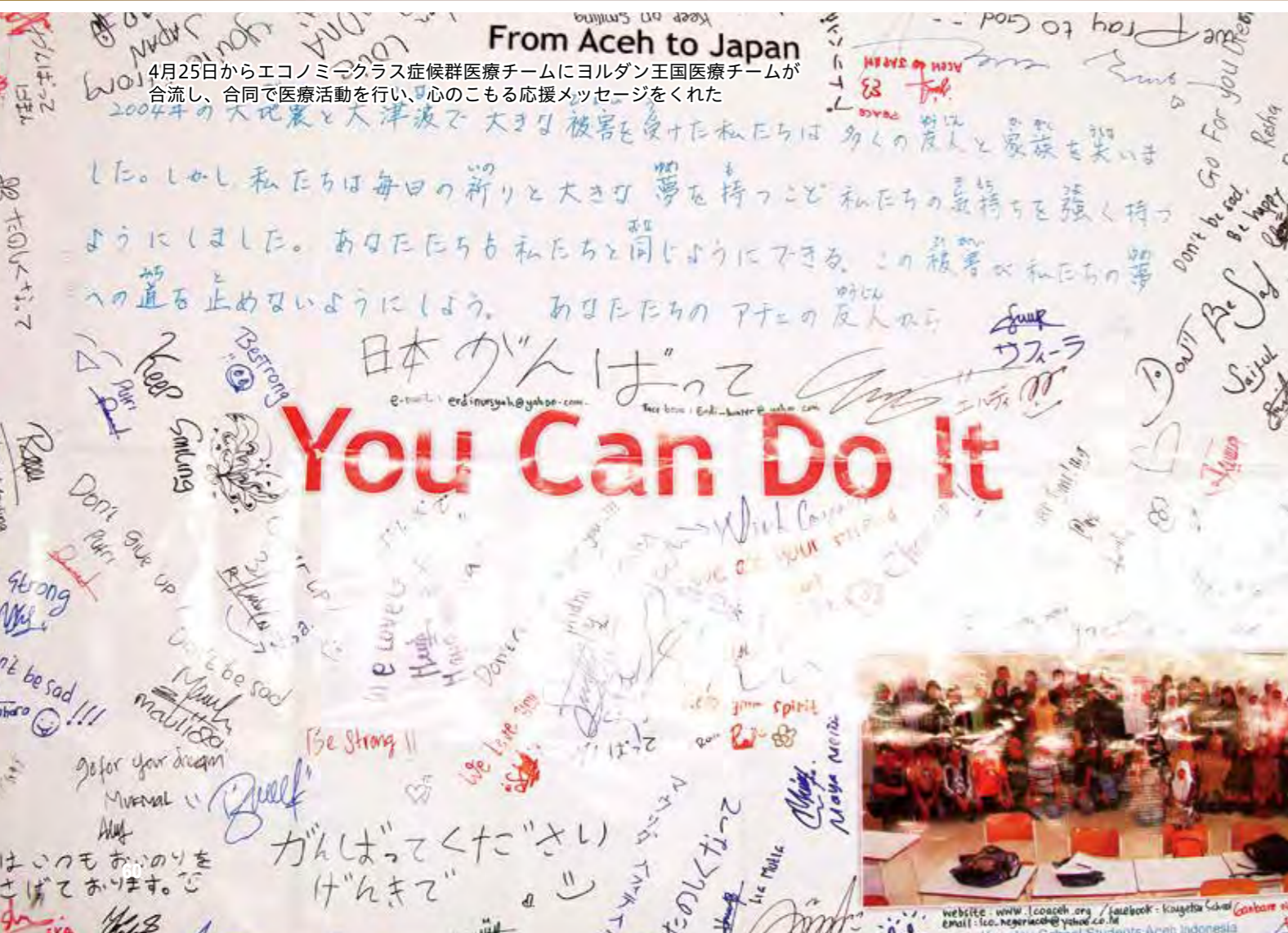
3月25日の朝、ブックポストに震災に遭われた方へのメッセージが入っていた



4月2日から本学エコノミクス症候群対策チームに参加したヨルダン王国医師団



5月9日からタイ王国医療チームが小児・感染チームと県内各地の避難所を巡回した



国際医療支援

世界各国からの医療支援に感謝



「エコノミクス症候群チーム」によるエコノミクスを用いた深部静脈血栓症スクリーニング



福島医大への幹線道も寸断…ツメ跡深く



土砂崩れて福島市伏拝の4号国道バイパスは完全にふさがれ、職員の通勤も困難になった(3月11日、福島民報社提供)



書架から落下した約4割(8万冊強)の図書を戻す復旧作業は一週間程で終わったが、原発事故の影響により休館し、5月2日ようやく再開した附属学術情報センター



附属実験動物研究施設では保管していた固形飼料が荷崩れし散乱した(上)。一部飼育室ではマウスケージが落下した(左)

2週間～4週間

避難住民医療支援として、高度医療の広域展開を行った。エコノミー症候群、小児・感染制御・耳鼻咽喉科・眼科、心のケア、避難所保健指導など、各チームに分かれて小型バスやバンを借り切り、県内の避難所を巡回した。他県からの支援医師が常駐しないところでは診療に行くと喜ばれた。全国からJMAT (Japan Medical Association Team) が来ている避難所では一緒に診療したり話を聞いたりした。5月になってヨルダンやタイから海外医療支援団を受け入れた。地域・家庭医療部と長崎大学を中心としたチームが30km圏内の在宅患者の訪問診療を行った。耳鼻咽喉科のニーズとしては、咽喉頭炎、アレルギー性鼻炎、鼻出血、耳垢などで、乾燥している施設では加湿器も喜ばれた。

3週間たってガソリンを入れることができ、通常の生活に戻った。外来は3月28日(月)から通常外来を開始し、定期手術も徐々にこなすようになり、4週間たってほとんど元通りの診療ができるようになった。ただ、放射線被ばく対応として、原発やその周辺で働く人や住民の万が一の被ばくに備えて除染や救急医療のシミュレーションを行っている。本学では、今回の未曾有の災害を医学・医療の面から科学的に検証し、災害に強い大学を作り上げ、安心して住める福島を取り戻すために、全学をあげて取り組んでいる。

福島市は原発から60kmの位置にあり、現在は通常の生活をしている。これまでの物心両面にわたるご支援に感謝するとともに、東北に来ていただくことが最大の支援であり、引き続きご支援を賜りたいと熱望している。

「地震・津波・原発事故における災害医療：前線基地としての大学病院」
福島県立医科大学附属病院副院長 大森孝一(2011年6月9日 日本頭頸部癌学会「東日本大震災報告会」)より

2011年4月1日以降の 福島県立医科大学 震災特設ページ

(http://fmu.ac.jp/index_shinsai.php)

2011

- 4.1 • 平成23年度臨床研修が開始されました。
- 4.11 • Acceptance of Donations
- 4.12 • 避難所内や学校内での感染症予防等のため、「感染対策手引書」を作成しました。
- 4.19 • 大学HPトップページを当ページ(震災対応)に切り替えました。
- 4.19 • 「災害医療の現場でがんばっています！」本学若手教員からのメッセージを掲載しました。
- 4.28現在 • 若手医学部・看護学部教員・学生ボランティア(医学部・看護学部)・研修医・看護部(附属病院HPへ)
- 4.28現在 • 大学構内環境放射線測定結果と屋外活動について
- 5.6 • 「本学敷地内の外気放射線量リアルタイム計測値」にフランス語訳を併記しました。
- 5.6 • ヨルダン王国医師団が国際医療支援のため本学医療チームに参加(Medical team of Hashemite Kingdom of Jordan joins our medical team as international medical support.)
- 5.6 • ※add French Niveaux de Radiation a l'air libre a Fukushima Medical University
- 5.6 • Medical team of Hashemite Kingdom of Jordan joins our medical team as international medical support.
- 5.9 • 平成23年度福島県立医科大学入学式学長式辞(5月6日挙行)
- 5.10 • 本学で開催された放射線に関する講演会の動画を掲載しました。(5月6日(金)山下俊一教授、4月22日(金)松田尚樹教授)
- 5.10 • 山下俊一教授監修による「放射線Q&A」を掲載しました。
- 5.13現在 • 大学構内放射線測定結果
- 5.17 • Updates on the Fukushima Nuclear accident (Reference) (to Department of Public Health)
- 5.23 • 京都府立医科大学から義援金と線量計をいただきました。
- 5.24 • 東日本大震災による被災学生に対する授業料・入学料の減免について
- 6.16 • 6月13日発行の医学書院「週刊医学界新聞」に、震災に関する本学の記事が掲載されました。
- 6.21 • 放射線・放射能を正しく理解するための市民公開講座を開催します。(7月10日(日)福島市・スクリーンライブ聴講当日先着160名受付)
- 6.27現在 • 大学構内放射線測定結果
- 6.30 • 7月3日(土)福島県立医科大学学生災害ボランティア活動報告会を開催します。



平成23年採用された研修医19名に対する雇用通知交付式



京都府立医科大学から義援金と線量計が贈られた



- (平成23年5月以降のご支援) 京都市立医科大学様(2011.5)、静岡県立大学様(2011.7)

- 7.6 • ヨルダン・福島医大医療チーム活動報告
• Report of joint medical team of Jordanian and FMU
- 7.8 • タイ王国と本学の合同医療チームが避難所を巡回訪問しました。
• Medical teams of the Kingdom of Thailand and FMU cooperate in refugee care
- 7.11 • 原発事故後の福島県内における甲状腺スクリーニングについて
• 静岡県立大学法人静岡県立大学学長木苗直秀様から、大量の支援物資をご寄贈いただきました。
- 7.12 • 新たな副学長の就任について
- 7.19 • 「学長からの手紙」番外編に、「日整会広報室ニュース」東日本大震災特集への寄稿文を掲載しました。
- 7.22 • ※現在ご覧の震災特設ページURLはhttp://www.fmu.ac.jp/index_shinsai.phpに変わりました。本学HPトップページを、震災前の通常版へ切り替えました。
- 7.25 • 佐賀県立病院好生館から義援金が贈呈されました。
- 7.26 • 「学長からの手紙」番外編に、フランスの医学者より贈られた東日本大震災に際しての日本人の姿を称えた詩を、特別編「学長への手紙」として転載しました。
• 民主党岡田幹事長が本学を訪問しました。
- 7.28 • 青少年・市民公開講座「いま知っておきたい「がん」のこと」を開催します。(9月17日(土))
- 7.29 • 7月31日(日)午前10時より、ラジオ福島にて福島医学会緊急シンポジウムの模様が7回シリーズで毎週放送されます。



民主党の岡田幹事長らが来学

- 8.8 • 日経メディカルカデットの特集「大地震で僕らは…」に、本学研修医・学生のインタビュー記事が掲載されました。(7月20日Vol.6 研修医)(7月21日Vol.7 医学生)
- 8.31 • 本学の理事長が広島大学、長崎大学を訪問しました。
• 独立行政法人放射線医学総合研究所、財団法人放射線影響研究所と連携協定を締結しました。



- 9.1 • 復興支援福島医大オリジナルTシャツを販売します。
- 9.5 • 東日本大震災犠牲者の検案活動に対して、福島県警察本部長から感謝状が贈呈されました。
- 9.6 • 山下俊一副学長が「朝日がん大賞」を受賞しました。
- 9.16 • 日本財団主催の国際専門家会議「放射線と健康リスク」が本学にて開催されました。



世界14カ国・2国際機関の放射線医学や放射線防護学専門家による国際会議が福島県立医科大学で開催された

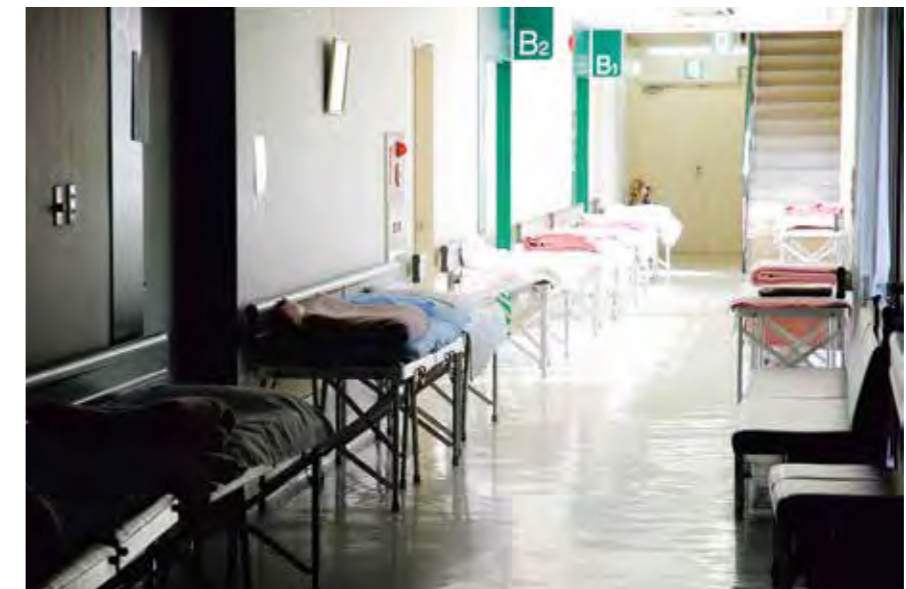
- 10.13 • 東日本大震災による被災学生に対する授業料・入学料の減免について
- 11.1 • 山下副学長が「世界保健サミット」で福島原発事故についての講演を行いました。
• 県民健康管理センター銘板掲出式が執り行われました。

- 「県民健康管理調査」ホームページ(暫定版)を開設しました。

- 12.28 • 東日本大震災等による被災学生に対する入学料の免除について

2012

- 1.20 • 日本経済新聞社と共催したシンポジウム(12月13日)が1月16日付紙面に掲載されました。
- 2.17 • 「県民健康管理調査」に詳細調査(こころ、妊産婦)の情報を掲載しました。
- 2.24 • 県民健康管理調査事務局からのお知らせ
- 3.9 • 震災から1年を迎えるにあたって本学理事長からの御挨拶を掲載しました。(トップページ左欄)
- 3.13 • 県民健康管理調査の英語版概要ビデオを掲載しました。
• Overview video of the Fukushima Health Management Survey
- 3.26 • 基本調査問診票の再交付申請がHP等から出来るようになりました。
- 3.27 • 福島民報社及び福島民報厚生文化事業団から、寄附講座「災害医療支援講座」にかかる寄附金が贈呈されました。
- 3.29 • 株式会社東邦銀行から、寄附講座「災害医療支援講座」にかかる寄附金が贈呈されました。
- 4.10 • 株式会社恒和薬品から寄附講座「災害医療支援講座」にかかる寄附金が贈呈されました。
- 4.16 • 細野環境大臣が本学を訪問しました。
- 5.21 • 「災害医療総合学習センター」の開所式が行われました。
- 6.11 • 株式会社東芝から寄附講座「災害医療支援講座」にかかる寄附金が贈呈されました。





復興を信じて!



ここが私の家

Kenneth E. Nollet [ノレット ケネス] 氏 (MD, PhD) は、大戸斉教授 (福島県立医科大学医学部長) が講座主任を務める福島県立医科大学輸血・移植免疫学講座の准教授です。2012年10月、同大学においてインタビューにお答えいただきました。

—先生は、今回の震災記録集に掲載されている写真の多くを撮影されました。撮影しようと思われたきっかけは何だったのでしょうか。

ノレット先生 ●震災後すぐに、アメリカ ミネソタ州の輸血医療専門家であるJed Gorlin先生から一通のメールを受け取りました。そこには、「無事ですか?これからのことをすべて記録するのです!いまこそ、輸血医療の緊急事態に国がどのように対応するのかを記録するときです。」と書かれていました。それ以降、アメリカに帰国する度に日本の震災対応について話すよう依頼され、講演を行ってきました。大戸教授や私、本学の他の先生方も、学会誌等に震災についての論文を書いています。

—在日米国大使館が日本にいるアメリカ人に対して避難を呼びかけていた間も、先生はずっと福島にとどまっていたらっしゃいましたね。なぜでしょうか。

ノレット先生 ●アメリカだけでなく、他の国々の政府も自国民に対して退去するよう強く勧めていました。一般的に言って、これはいいアドバイスであったと思います。というのも、ここ福島ではあらゆるものが著しく不足する事態になっていたからです。何か役に立つことがなければ、外国人が日本にいることは日本の皆さんにとって負担になりかねませんでした。

—ということは、先生にはなすべきことがあったということですね。記録集の写真の中で、先生が全学全職種ミーティングでお話されているものが1枚ありますが、先生のご役割、またどんなこととお話されていたのか、教えてください。

ノレット先生 ●全学全職種ミーティングは、最初の頃は一日3回行われており、その後は

一日2回、さらに一日1回の頻度で開かれていました。各部門から代表者が出席し、私の所属講座からは私以外にも出席者がおりました。私の参加者としての役割は、本学の活動を記録し世界に向けて発信すること、翻って海外メディアの報道内容や海外からの問い合わせ内容について出席者に伝えることでした。



—アメリカのご家族やご友人に対して、どんな思いがございましたか。

ノレット先生 ● 家族に送った最初のメールは、かなり手短なものでした。「福島で非常に大きな地震があり、海外でもニュースになるだろう。私は無事だ。」このメールは、スタッフの安全と輸血部の状況を確認してからすぐ

に送信しました。この頃、東北地方で2万人もの人が突然命を奪われてしまったことなど、知るよしもありませんでした。海外にいる私の家族や友人は、被害状況が分かると日本のために涙を流し、助けになりたいと考えました。彼らは正確な情報を求めていましたが、メディアが必ずしも正確な情報を提供しているわけではありませんでした。それで、私が彼らのためにその役割を果たすことになったのです。

—福島にいらっしゃったのはいつですか。またその理由について教えてください。

ノレット先生 ● 私が福島県立医科大学に来たのは2008年1月のことでした。2004年から、私はオーストラリア赤十字血液サービスで医学教育プログラム部長をしておりました。また、クイーンズランド州の輸血医療専門家でもありました。とはいえ、私はオーストラリア国民ではありませんから、私の後任となるオーストラリア人の医師が見つければその職を去らなければならない状況にありました。当時、大戸教授と私はある論文を共同で書いていました。そのジャーナルがもうすぐ出版されるというとき、私は自分の所属として「オーストラリア赤十字」と記載することはもうできませんでした。大戸教授に理由を説明すると、彼はこう尋ねました。「では福島にいらっしゃいませんか。」私が最終的なお返事をする前から早速大戸先生は事にあたり、出版された論文には私の所属先として福島県立医科大学と記載されたのでした。

—それはさぞかし大きな変化だったと思います。日本の食べ物についてはいかがでしょうか。

ノレット先生 ● お寿司や刺身を食われるかと、よく聞かれますね。ええ、食べますよ。福島でも指折りの寿司職人のうち、一人は附属病院の食堂で腕をふるっていらっしゃいます。納豆も玄米も好きですね。いまでも地元でとれた玄米を買って食べています。原発事故後、精米することでセシウムが取り除かれるというのを聞いて、玄米はやめて白米にした方がいい、と強く勧められたこともありましたが、しかし原発事故後は何ヶ月にもわたっ

て作物の収穫は行われませんでしたし、放射性物質検査も行われるようになりました。放射性物質が検出された米は市場に出回りませんでした。

—日本で暮らしていて、食べたくなる母国アメリカの食べ物はありますか。

ノレット先生 ● 今日では、アメリカの食べ物は良くも悪くもどこでも手に入ります。私のルーツは北欧なのですが、日本で生活していて食べたくなるのは北欧料理、特にルーテフィスクですね。伝統的な東北の食べ物は、塩で保存されているものが多いですが、ルーテフィスクは灰汁（伝統的な作り方ではカバノキの灰）で保存します。現代では塩分摂取による高血圧が問題となっていますが、もしかしたら私も含めコーカサス系の民族は日本人よりも塩分に対する感受性が高いのかもしれませんが。アメリカの専門家は、一日当たりのナトリウム摂取量を1.5グラム未満に抑えるよう勧告していますが、日本では6グラムまで許容されています。そして平均的な日本人の食事には一日当たり10グラム以上含まれています。2010年の終わり頃、本学の循環器専門の先生に自分の高血圧のことで相談したところ、彼は塩分摂取にもっと注意するようと言いました。それから私の血圧は正常に戻りました。私にとっては、セシウムよりもナトリウムの方がより大きなリスクです。

—オーストラリアでは、後任候補の医師が先生の職を求めたために去らざるを得なかったとのことですが、福島ではどうなのでしょう。

ノレット先生 ● 3.11の前と後とで、合計2回「教授ビザ」を更新する必要がありました。どちらの時も、本学の菊地理事長は無制限・無期限で私を雇用するという旨の書類に署名をしてくださいました。

—今後についてお聞かせください。また、日本の皆さんに対してなにかメッセージがあればお願いいたします。

ノレット先生 ● はい。定期的に更新する必要のあるビザを持っていること、私はこれを日本に住む権利だとは思っていません。これは私にとっては日本に住むことが出来るという名誉なのです。皆さんにも、この島国で暮らすということがどんなに素晴らしいことか、振り返ってみてほしいと思います。2011年の終わり頃、東京で教授と講座主任の職を考えてみないかとお誘いを受けました。確かに、東京はいいところだと思います。福島から新幹線で1時間半ほどで行けますし。東京に行くのは好きです。しかし、もっと好きなのは福島に帰ってくることです。ここが私の家なので。





3月11日当日



福島市蓬莱町のスーパーに行列をつくる人々



震災被害(蓬莱団地)



全学全職種ミーティング



病院前の仮設トイレ



患者を移送する救急車と救急隊員



除染棟とテント



学内放射能測定実験中



吾妻山をバックにしたドクターヘリ

ノレット先生は本学の活動を記録し世界に発信するため、病院内外の震災被害や全学全職種ミーティングの様子、ドクターヘリや救急隊員・自衛隊等の活躍、除染棟など、大震災に起きた様々な局面を撮影した